

佐土原キリスト教会 2023年11月5日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書6章9節 a

説教題：「天のお父さん」

前のオバマ大統領が大統領に就任した時の就任式の様子を伝えるインターネットの番組を、私はある種の興奮をもって見ました。就任式で祈ったのはリック・ウォレンという牧師でした。(以前「水曜集会」で彼の本を学びましたが…)。彼は長い「祈り」をしましたが、最後に祈ったのは「主の祈り」でした。私は改めて「主の祈り」がキリスト教の中で持っている重要な地位を確認させられる思いでした。

私達が良く祈る「天にまします我らの父よ」という「祈り」の言葉は、今の聖書の言葉ではありません。1880年(明治13年)に日本語に翻訳された「聖書」の中で使われた言葉です。しかし一旦それが覚えられると、言葉を変えるのは難しく、日本の教会はそれ以降、「明治訳聖書」の「主の祈り」を祈り伝えて来ました。いずれにしても、どの国であれ、およそキリスト教会は「主の祈り」を大切に祈り続けて来ました。なぜかという「ルカ11章」にこうあります。「さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。『主よ。ヨハネが弟子達に教えたように、私達にも祈りを教えてください』(ルカ11:1)。「ルカ福音書」では、この後でイエスが「主の祈り」を教えておられます。当時、ユダヤ教には幾つかのグループがありましたが、それぞれのグループが、その信仰の特色を表す独自の「祈りの言葉」を持っていたようです。その中でイエスがこの「祈り」を弟子達に教えられたということは、「この祈りそのものがイエスのグループ、つまりキリスト教会の特色を表す」と言うこととなります。「キリスト教のエッセンスを表現する」と言っても良い。だから大切にされて来たという面があると思います。

今朝は、その「主の祈り」の最初の言葉、「天にいます私たちの父よ」という言葉を学びます。イエス様は、「祈り」の始めの言葉としてこの言葉を教えて下さいました。この言葉の凄いところは、この言葉をもって祈る時、私達の祈りが神様の許に通じるということです。神様の携帯電話の番号のようなものです。その意味でも大切な言葉です。

しかしそれだけではなく、古代のテリトゥリアヌスという人は『主の祈り』は福音の要約だと言いましたが、現代のある神学者は『天にいます私たちの父よ』の呼びかけこそは、福音の要約の要約だと言ったそうです。それほどこの短い呼びかけの言葉に、キリスト教信仰のエッセンスが込められているということでしょう。この短い言葉は何を教えるのでしょうか。「天にいます私たちの父よ」、ギリシャ語では「父よ、私達の、天におられる」という順番になっています。そこでこの3つの言葉についてそれぞれ考え、「天にいます私たちの父よ」という祈りの言葉の理解を深めたいと思います。

1. 「父よ」

「主の祈り」は、まず「父よ」と呼びかけるのです。この教会でゴスペルコンサートをしてくれた森繁さんに初めてお会いした時(30年以上前になりますが)、驚きだったのは、彼は祈り始める時、「天のお父さん」と祈ったのです。私には新鮮な言葉でした。私は「ご在天の父なる御神様」という畏まった言葉で祈り始めることが多いのですが、でもイエスご自身は「アバー(パパ、お父さん、お父ちゃん)」という言葉で神に呼びかけて祈られたようです。そしてここでも(恐らく)「お父さん(お父ちゃん)」というような親しいニュアンスで呼びかけるように教えて下さったのだと思います。「主の祈り」は、申し上げた通りイエスのグループの信仰を特徴づけるという意味がありました。その意味では「私達の信仰の告白」という意味もあります。つまり私達は、神様に向かって「父よ(お父さん)」と呼びかける中で、「私達の頂いている信仰は、天地万物の創造者なる神を『お父さん』と呼ぶ、呼べる、そのような信仰である」ことを告白するのです。

「旧約」の中にも、神様を「父」と呼ぶ例がないわけではありません。しかし稀なことです。「旧約」時代は、神は畏れ多い方だった。あの信仰の父アブラハムでさえ、神様に向かって「お父さん」と呼びかけることはありませんでした。しかし私達は、「お父さん」と呼びかけることが出来るのです。なぜ、そう呼ぶことが出来るのか。それは、イエスご自身が「そう呼んで良い」と言われたし、また私

達が神様を「お父さん」と呼べるように—（「お父さん」と呼べるということは、その子供になっているということですから）—つまり私達が「神の子供」になれるように—イエスが十字架に懸かり、私達に「神の子供」となる道を開いて下さったからです。「ヨハネ福音書」は言います。「しかし、言葉(イエス)は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」(ヨハネ 1:12)。イエス様によって、私達は「聖なる神」を「お父さん」として持っている、それが私達の祈りの根拠だし、私達の信仰の核心でもあります。

しかし、「お父さん」と呼べるということはどういうことかと言うと、私達は「お父さん」と呼びかけながら、神様に親しみを持たせて頂くと同時に、信頼を捧げて行くということではないでしょうか。神様を「お父さん」と呼ぶ、その信仰とは、子が親の愛を信頼して、委ねて生きるように、「本当に神様を信頼する」、「私の信仰は、そのような信仰なのだ」と告白していることになるのではないのでしょうか。

ある姉妹が、障害を持つ弟さんの熱心な誘いで教会の礼拝に参加するようになりました。しかし義理で参加しているだけで、熱心に求めてはいませんでした。彼女は、お母さんのことを、弟に人生を捧げさせられた被害者だと思っていたのです。ところがそのお母さんが亡くなり、お母さんの葬儀で牧師は語りました。「神様が障害者の博文さんを、目的を持って、神様の目からは最高の作品としてお造り下さいました。そしてお母さんは、この女性ならこの子をまかせても大丈夫だと、多くの女性の中から選ばれた、強く素晴らしいお母さんです」。彼女が、神様に対する見方を変えられるきっかけになる出来事でした。その後、彼女は障害を持つ人のお世話をする仕事に就きますが、その人達に心から愛を持って接することの難しさに悩むようになります。愛することが難しいのです。愛せない自分が見えるのです。そんな時、ある集会で、「放蕩息子」の話が語られ、自分と重なりました。父に財産を分けてもらい、自分勝手に生きて財産を食い潰し、ボロボロになって帰って来た息子を、温かく迎えてくれた父(神様)の話です。その話に聞き入っているうちに、彼女の心は神に触れられました。彼女は言っています。「走り寄って抱きしめて下さった神様の御手の感覚が体中に感じられました。私は子供のように泣きじゃくり、神様の胸に飛び込んで行きました」。彼女は、この時から本気で神様を求めるようになり、やがて洗礼を受けるのです。

申し上げたいのは、神様を「お父さん」と呼ぶ、その信仰とは、神様の胸の中に飛び込む信仰だと思うのです。ボロボロになって帰って行った息子のように、泣きじゃくりながら神の胸に飛び込んだ彼女のように、神に委ねて、「本当に神様を信頼する、私の信仰はそのような信仰なのだ」と告白していることになるのではないのでしょうか。神に心からの信頼を捧げる信仰、それがまず「主の祈り」でイエス様が教えて下さった信仰です。

2. 「天にいます」

そのことは、次の「天にいます」という言葉の中で更に告白されます。神様のことを「天にいますお父さん」と呼びかける、その「天にいます」という呼び掛けには、どのような思いが込められているのか、どのような思いを込めるのか。

多くの人は「天は我々の手の届かないところ、その天が地を支配している。しかもその天の支配は、人間の自由にはならない」。そういう意味で「天のことは、諦めながら受け入れるもの」と考えているのではないのでしょうか。「運を天に任せる」という言葉は、それを本気で言っているとすれば、正にそういうことでしょうか。何か、私達の手には負えない力が私達の人生を振り回す。その時は諦めるより他に道はない、と考える。しかし、私達が「天にいます父よ」と呼ぶ時、私達は「全てを支配するのは天におられる私達の父である」と言い切るわけです。「私は、訳の分からない運命の力というようなものに支配されているのではない」と告白するのです。

私は、東日本大震災のことを思わずにはおれません。震災の時というのは、キリスト者が「天にいます…父よ」と、心から神の支配を告白出来るのかどうか、内なる戦い、疑いと戦い、諦めとの戦いの時だったと思うのです。神が天におられ、一切を支配しておられるなら、「なぜこういうことが起こることを、神は許されたのか」と、多くのクリスチャンが心揺すぶられたと思います。もちろん、

この世界はまだ悪の力が働いている世界です。震災の背景にも、そこに人間を苦しめ、人間を神から引き離そうとする悪の働きがあったことが考えられます。

でも、そういうことよりも、私は、私達があの震災の中で見るべきことは、大変な災害の中で起こった信仰者の奇蹟だと思うのです。私達も間接的に支援させて頂いた気仙沼の印刷所の阿部克衛さんがこんな文章を書いておられます。「今回の津波の体験は、私に対する神様からのチャレンジだと思います。それは、全財産を失ったという現実を前に、自分でここまでやったという自負もプライドもリセットされ、『ゼロからの出発でも本気でわたしを信じ、従い、ビジョンを達成する意志があるのか』という神様からのチャレンジでした…旧約聖書に出て来るヨブは…生活は一変して悲惨な毎日となりました。このような試練の中でも神を恨まず、神に対して罪を犯すこと無く『主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな』と告白しました。神はヨブの信仰の故に以前に勝る2倍の祝福を与えました。私はヨブのようなものではありませんが、神様は真実な方であると信じてこれまでの人生を歩んで来ました。きっとヨブのように『主の御名はほむべきかな』と言える日が来ることを信じ、日々、天を見上げて希望を持ってこの大震災の試練を…乗り越えて行きたいと思います」(阿部克衛)。一番、疑いの中にいるはずのクリスチャン達が、疑いと闘い、諦めと闘い、絶望と闘う闘いをしたのです。その闘いの中で神の恵みによって立たされたのです。試練の中で信仰を生きたのです。励まされます。

数年前のクリスマス、「愛はあきらめない」というトラクトをお配りしましたが、横田早紀江という方は、お嬢さんが行方不明になり、その絶望の中で、聖書に出会います。彼女も「ヨブ記」を読んで、最後まで神に目を向けて苦難の時を通り抜けるヨブの姿、どんな苦難の中でも神を信頼するヨブの姿に感動し、「人を越えた深く大いなるもの、真実の神の存在を感じ」、そして信仰告白に導かれるのです。「『神様、私は本当に罪深い、生まれながらのわがままな者です。人知の及ばないところにあるあなたが、この世の悲しみ、苦しみ、全てのものを飲み込んでおられることを信じます。めぐみの悲しい人生も、この小さな者には介入できない問題であることを知りました』。こうして、私は神を受け入れました」(横田早紀江)。またこう言うておられます。「『神は愛です』と聖書にあります。神はきよくて、正しい愛にあふれたお方だということを、そして私達は、その方の手の中に包まれて生かされているのだということをいつも思われます。私が人生の意味がわからなくても、神が私の人生に意味をもって下さっていると信じます…神が私を諦めないで愛して下さいます。だから、私は諦めないでいられるのです」(横田早紀江)。

彼らは「自分がどんなに不幸を経験していても、どんなに辛い思いを経験していても、神が自分の父であることに変わりはないこと、この父なる神こそ、私が生涯を賭けて信じて良い、支配者なる神であること」、それを言い切る、それを生きて見せて下さっているのです。であれば私達も、生かされている日々を感謝出来るし、神が全てを支配しておられることを感謝出来るのではないのでしょうか。

「天の父よ」という信仰に生きることで、お互いを励まし合うことが出来るのではないのでしょうか。

2004年、スマトラ島沖で地震が起こり、津波が起こり、多くの人が被害に遭いました。その被害に遭った当事者の牧師がこう言っています。「どのような状況にあっても、神に信頼するところに希望は生まれたのだ」。私達は「天にいます父よ」と祈り、「天におられる父が、それでも、全てを支配しておられるのです。その神の支配に、私は信頼するのです」と告白することによって、信仰を生きたいと願います。そして、たとえ自分にどんなことが起こっても、神を信頼し、神に拠りすがって、絶望と闘うこと、諦めと闘うこと、神の中に希望を見て行くこと、そのような生き方の備えもして行きたいと思うのです。

3. 「私達の」

3つ目の言葉は「私達の」という言葉です。確かに「マタイ福音書」の文脈では、「主の祈り」は「密室の祈り」として教えられたものです。それでもイエスは、「私の」とは教えられず、「私達の」と教えられました。「私達の…」という言葉は、何を教えるのか。

それは「私達は同じように神を『お父さん』と呼びかける兄弟姉妹を持っている」ということです。「お父さん」と呼ぶ兄弟姉妹の長兄は誰か。イエス様です。イエスが先頭に立って「天にいます私達

のお父さん」と呼んで下さる。だから私達は、何よりもイエス様の声に合わせて—(イエス様に続けて)—「天にいます私達のお父さん」と呼ぶのです。そして私達がイエス様の声に合わせて「天にいますお父さん」と呼ぶ時、同じように声を合わせる兄弟姉妹がいるのです。私達がカナダで奉仕していた時、私達は韓国のクリスチャンに本当にお世話になりました。戦前、戦中の日帝時代が残した傷は、今も日韓関係に深い溝を残しています。でも「主に在って」、韓国のクリスチャン達は、愛を持って私達に接して下さいました。ある時、韓国系の教会が私達に礼拝場所を貸してくれました。最初の礼拝には、その教会の牧師先生と長老の方々が出席して下さいました。大きな花輪まで送って下さった。私は「ありがとうございました」とお礼を言いました。そうしたら長老の1人の方が言われました。「私達にお礼を言わないで下さい。お礼は神様に言って下さい」。同じ神様を「私達の父よ」と一緒に見上げている、素晴らしいことだと思いました。私達はこの祈りの中で「私は1人ではない」ということを確認し、告白するのです。

しかし「主の祈り」が「祈り」のモデルでもあり、私達に「キリスト教の祈りとは何か」を教えるものであるとするなら、私達が「私達の父よ」と呼ぶ時、その「祈り」は、共に神を「お父さん」と呼ぶ兄弟姉妹への配慮を心のどこかに持った「祈り」であることを、決して独善的な信仰ではないことを、告白して行くのではないのでしょうか。良く言われます。「信仰生活で一番難しいのは、練られた交わりを造り上げて行くことだ」と。練られた交わりというのは、1人ひとりが悩みながら、心を砕きながら、問題を信仰的に捉えて、信仰的に解決しようとして行く、お互いに信仰を働かせて、柔和、寛容、愛、平和を分け合おうとする、そのような結果として造り出されて行くものではないのでしょうか。私達が信仰を働かせることができた時、信仰の業は美しいです。私達は「私達の父よ—(私達のお父さん)」と祈ることによって、共に神に「お父さん」と呼びかけている兄弟姉妹に対して、「祈り」の中で心を開くのです、心を砕くのです。そう教えられるのです。

4. 最後に

「天にいます私たちの父よ」。イエスは、ご自身が使っておられた「祈り」の言葉を、私達に明かして教えて下さいました。感謝なことです。「『祈り』は、祈ることによってしか学ぶことが出来ない」と言われます。神に向かって祈る時にしか至ることが出来ない境地があります、恵みがあります。「天にいます私達のお父さん(お父様)」、色々な言い方があるでしょうが、いずれにしても、「お父さん」と呼びかけつつ、「お父さん」と祈りつつ、神への信頼を捧げ、日々の生活を造って行きましょう。